

序

新型コロナウイルス感染症のパンデミックを経て、感染症診療を取り巻く状況は大きく変化した。発熱や炎症反応上昇を契機に、画像検査が行われる場面は日常診療で多く、画像診断医が感染症の診断と治療方針決定に果たす役割は、一層大きくなっている。

画像診断においては、「炎症か」「非炎症か」という対立軸がしばしば問題となる。しかし、実臨床では、それと同時に「感染症か」「非感染症か」を見極める必要に迫られる場面も少なくない。膠原病、血管炎、悪性腫瘍、薬剤性変化など、感染症と類似した画像所見を呈する疾患は多い。特に近年は、免疫チェックポイント阻害薬に伴う免疫関連有害事象（immune-related adverse events；irAE）をはじめ、新たな薬剤に関連した病態も次々と登場しており、鑑別診断には常に知識のアップデートが求められる。

さらに、感染症の画像診断を考える上で重要なのは、画像に映し出されているものが病原体そのものではなく、それに対する宿主の免疫反応であるという点である。したがって、同じ感染症であっても、年齢、基礎疾患、免疫状態、発症時期、治療介入の有無により、画像所見は大きく変化しうる。このことが感染症診断を難しくし、同時に奥深いものになっている。

一方、臨床現場では、典型像から外れた症例や緊急性の高い感染症であっても、経験に裏打ちされた判断によって、鮮やかにマネジメントされている例も少なくない。そこには、教科書的知識やエビデンスだけでは伝えきれない診断の勘所、多くの経験で磨かれた、匠の美しい実践知がある。

本増刊号『お教えします！ 感染症の基礎から診断の極意まで』では、成人感染症、小児感染症に関する臨床医からのメッセージを冒頭に据え、中枢神経から骨軟部まで各領域の感染症診断を幅広く取り上げた。本号が、感染症診断における“知”を共有し、画像診断医はもちろん、各診療科の医師にとっても、明日からの診療に役立つ1冊となれば幸いである。

2026 年 7 月

奈良県立医科大学 放射線診断・IVR 学講座

山内哲司

自治医科大学とちぎ子ども医療センター 小児画像診断部

松木 充